

表在性非乳頭部十二指腸上皮性腫瘍と内視鏡的胃粘膜萎縮及びピロリ菌感染との関連に関する多施設共同後ろ向き症例対照研究

研究対象

2016年1月から2018年12月までに、石川県立中央病院、福井県立病院、大阪国際がんセンター、福岡大学筑紫病院、熊本大学、九州大学病院、高知赤十字病院において、表在性非乳頭部十二指腸上皮性腫瘍(SNADET)に対して内視鏡的または外科的切除且つ病理学的評価がなされた患者さんを対象とします。

研究の意義

表在性非乳頭部十二指腸上皮性腫瘍の発生率は低く、内視鏡スクリーニングで発見される十二指腸腺腫の頻度は0.4%未満と報告されています。その疾患頻度の低さもあり、内視鏡治療の適応を含めた治療指針が確立していないのが現状であります。しかしながら、十二指腸癌は小腸癌の中では最も頻度が高い腫瘍であり、十二指腸腫瘍の報告例も年々増加しています。上部消化管内視鏡検査の標準化や、十二指腸腫瘍で最も高頻度な腺腫や腺癌が高齢男性に好発することから高齢化社会の進展も本邦における罹患率上昇に影響を与えているのではないかと報告があります。さらに、最近の研究では、十二指腸腫瘍と内視鏡的胃粘膜萎縮またはピロリ菌との関係が示唆されています。十二指腸腫瘍と非萎縮性粘膜との関係を示唆している報告もあれば、ピロリ菌陽性が十二指腸腫瘍の危険因子であるとする報告もあります。このように、相反する非萎縮性粘膜およびピロリ菌陽性が十二指腸腫瘍の原因として示されており、これらの関係は十分に検討されていません。

そこで私たちは、表在性非乳頭部十二指腸上皮性腫瘍の治療を受けた患者さんの診療録を元に、内視鏡的胃粘膜萎縮またはピロリ菌感染との関連性を調べることにしました。

目的

本調査研究は、表在性非乳頭部十二指腸上皮性腫瘍と内視鏡的胃粘膜萎縮またはピロリ菌感染との関連性を明らかにすることです。

方法

当院のほか、福井県立病院、大阪国際がんセンター、福岡大学筑紫病院、熊本大学、九州大学病院、高知赤十字病院の既存の診療録から、対象となる患者さんの背景、腫瘍特性についての調査を行い、調査票をもとに、必要な解析を行います。本調査研究により新たに発生する検査はありません。

個人情報保護に関する配慮

本研究では情報は匿名化され、個人が特定されることはありません。また、個人が特定され

るような情報は一切公表いたしません。上記の研究対象に該当する患者さんで、ご自身の臨床情報を本研究に使用しないでほしいというご希望がある方は、当施設の担当医、もしくは以下の連絡先にご相談ください。

研究代表者(本研究全体の責任者)

石川県立中央病院 消化器内科 土山 寿志

照会先および研究への利用を拒否する場合の連絡先

石川県立中央病院 消化器内科 辻 国広

〒920-8530 石川県金沢市鞍月東 2-1

TEL:076-237-8211 FAX:076-238-2337

福井県立病院 消化器内科 川崎 梓

〒910-8526 福井県福井市四ツ井 2-8-1

TEL:0776-54-5151 FAX:0776-57-2945